

# てんとうむし

**特集**

## 「さがみはらのスクールソーシャルワーカー」



### 題名「てんとうむし」の由来

ヨーロッパの言い伝えにてんとう虫の話があります。  
 領主は殺人の罪で死刑になる若い農夫に、最後の願いとして神に祈ることを許しました。若者が石の上にひざまずくとき、1匹のてんとう虫が石の上におりました。若者はそのてんとう虫をつまみ上げると、そっと逃がしてから最後の祈りを捧げました。飛び立ったてんとう虫はこの若者を捕らえた殊勲者の左手に止まりました。殊勲者はてんとう虫には全く哀れみもかけずにつぶしてしまいました。  
 この様子を見ていた領主はこの相反する二人の行動にハッと胸をつかれるものを感じ、裁判をやり直しました。その結果、若者はぬれぎぬで真犯人は殊勲者であったことがわかりました。てんとう虫は真実を伝える虫として、古来ヨーロッパで親しまれてきました。この話にあやかり題名を「てんとうむし」としました。

目次

- 巻頭言：今、自分たちにできること…………… 2 ページ
- 不登校対策プロジェクト21…………… 3 ページ
- 特集**「さがみはらのスクールソーシャルワーカー」…………… 4～7 ページ
- 「ほっとひとこま」「日日草」…………… 8 ページ



モバイル青少年相

## 今、自分たちにできること

日本の高校生「自分に満足24%」という記事が読売新聞（2011年2月25日朝刊）に載っていた。これは日米中韓の4ヶ国の調査で、日本の高校生がもっとも自分に満足していないという結果である。ちなみに米国は89%、中国88%、韓国75%であり、日本の数字は極端に低くなっている。もちろんこの数字をそのまま信じるわけではないが私たちがこれまで進めてきた教育や社会制度を振り返る必要はある。

さて、教育界には非行、不登校、いじめなど多くの課題がある。文科省の統計によると日本全体で10万人以上の児童、生徒が学校に行けないでいる。さらに非行やいじめも依然と高い数字である。その原因の一つに、自分に自信が持てない児童、生徒が多いからではないだろうか。つまり自分に自信が持てれば問題解決に近づくと考えられる。

子供の本質は素直で明るく、元気がいい。小学校の低学年の子供はいつも向上しようと自信満々、意欲的に生きている。大きな声であいさつができ、自分の考えを堂々と述べるができる。この小学校の姿を大人まで持ち続ける教育ができれば自分に自信を持てるはずである。

そのために私は次の三つのことを提案したい。

一つ目は授業の中でグループで話し合う場面を多くつくって行くことである。はじめに課題について徹底的に調べ、自分の意見を持ち、その意見を友だちとぶつけ合うことによって新しい考えを持つことができる。いわゆる世界で行われているPISA型の授業を行うことにより、自分に自信が付き、友だち

も尊重することができるようになる。

二つ目は自然体験の充実である。本当の学びは体験により本物になる。どれだけ知識を詰め込んでも、覚えているのは一時的であり、すぐに忘れてしまう。しかし、体験を通して学んだことは一生忘れることはなく、本当の学力となる。さらに友だちと同じ体験をすることによりお互いが認め合い、友情が芽生え、自分に自信が持てるようになる。

三つ目は生涯の学習のはじまりである小学校でこれから取り組まなければいけないことである。それは低・中学年を中心とした補習の実施である。学校によっては夏休みには学習につまずいた子供に個別指導を行っているが、ほとんどが強い向上心を持っていることに気づく。私たちはこの子供の向上心を学力につなげて行かなければならない。フィンランドでは低学年に教員やボランティアを厚く配置して、日常的に補習をしていると聞いたが、小さいうちにつまずきを取り除き、学習に対して自信を持たせている。

自分に自信を持ち、自分に満足する豊かな人生を送ることは人間にとって大きな目的である。そのためにはグローバルな視点で自分たちの教育を見直していく必要がある。私は今まで取り組んでいた討論や体験学習を大切に、さらに社会全体で子供の学習を見守っていけば多くの課題は意外に早くに解決できるのではないかと考える。

相模原市公立小学校長会

会長 金山 光 一

# 青少年相談センター情報発信



## 不登校対策プロジェクト21

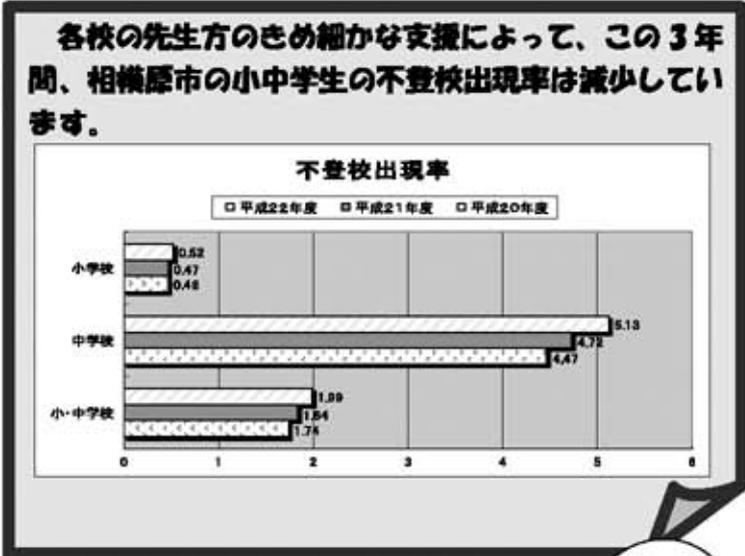


### ポイント1

不登校は、学校に「行かない」のではなく、「行けない」という視点をもつことも大切です。

不登校の子は、「困った」子ではなく、「困っている」子という見方をしてみましょう。

★(1) 相模原市の不登校出現率のグラフです。



★(2) 次の表は、国と神奈川県と相模原市の不登校及び長期欠席状況を比較したものです。

みなさんは、この結果をどう受け止めますか？

平成22年度 相模原市・神奈川県・国の不登校・長期欠席状況の比較

	在籍数(人)		不登校者数(人)		不登校出現率[%]		長期欠席率[%]	
	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校
相模原市	38,117	17,947	174	802	0.46%	4.47%	0.69%	4.91%
神奈川県	474,156	203,132	2,246	7,556	0.47%	3.72%	0.94%	4.36%
国	6,674,858	3,406,844	21,675	93,296	0.32%	2.74%	0.77%	3.50%

中学生になると、なぜ不登校が増えるのでしょうか。

※長期欠席とは、病欠、不登校、家庭事情等にかかわらず、年間30日以上欠席したということ

本市の小学生は、長期欠席率が低い。

★(3) 青少年相談センターでは、不登校対策プロジェクト21を展開しています。

プロジェクト21とは、長期欠席児童生徒(特に全欠)の集計と分析を綿密に行い、青少年教育カウンセラーやスクールソーシャルワーカーの支援等を充実させるとともに、学校と連携して再登校に向けた効果的な支援のあり方を探る実践的な取り組みです。

主に中学校への取り組みの重点として、

- ① 全欠生徒へのアプローチ
- ② 中学校の不登校出現率が高い要因の調査・研究
- ③ 学校へのサポート、情報発信



### ポイント2

- ・病欠、事故欠にかかわらず、3日連続して欠席したら家庭訪問をしてみましょう。
- ・月3日以上欠席した児童生徒の情報を、教育相談担当者や青少年教育カウンセラー等に伝えましょう。

**特集**

# まがみはらのスクールソーシャルワーカー

スクールソーシャルワーカー（以下、SSWという）は、児童生徒を取り巻く家庭環境の改善に向けて、学校や関係機関と共によりよい支援を考えていく社会福祉の専門職です。

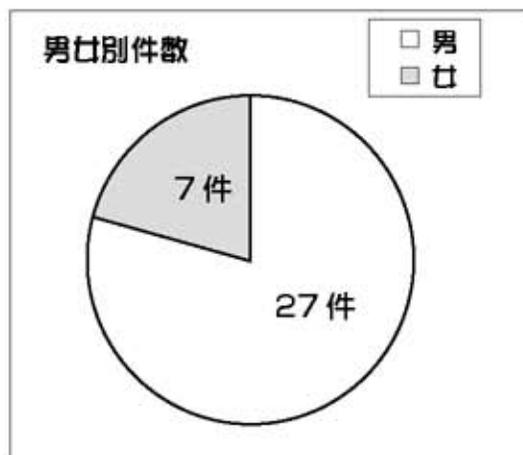
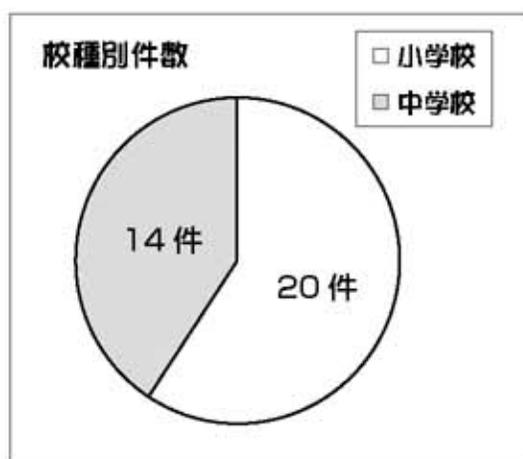
本市では本年度から2名のSSWを導入しました。主な役割は次の2点です。

- ① **ケース支援機能**…家庭環境に起因した不登校や問題行動等のケースに対して、福祉的視点を交えた情報の収集・整理や助言を行います。さらに、家庭・学校・関係諸機関との「つなぎ役」を行い、連携の強化を図ります。
- ② **研修機能**…ソーシャルワーク的視点の啓発・活用を推進するために、教職員や地域人材等に対応した研修を行います。

本年度、受理したケースは次のとおりです。（平成23年9月30日現在）

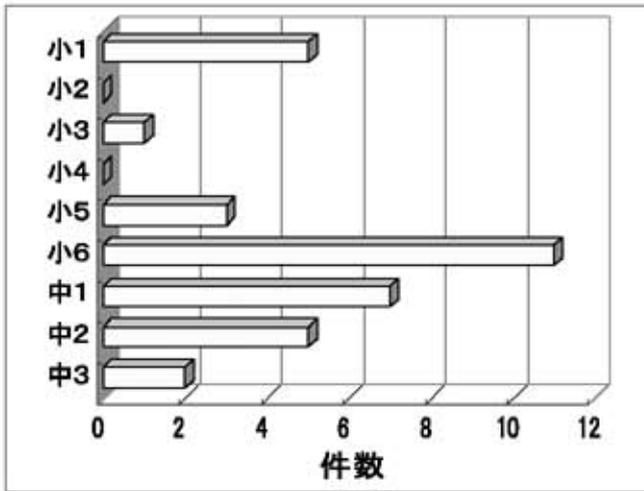
No.	課題となる 主な環境要因	表面化している 主な子どもの状態	学年
1	養育 に関する問題	問題行動の未然防止	小1
2		学校内での問題行動	小1
3		長期欠席	小5
4		欠席がち	小6
5		長期欠席	小6
6		欠席がち	中1
7		問題行動の未然防止	中1
8		学校内での問題行動	中1
9		非行	中2
10		非行	中2
11		長期欠席	中2
12	保護者の精神面 に関する問題	長期欠席	小1
13		長期欠席	小1
14		欠席がち	小1
15		欠席がち	小3
16		教室に入れない	小5
17		学校内での問題行動	小6
18		問題行動の未然防止	小6
19		長期欠席	小6
20		長期欠席	小6
21		長期欠席	中1
22	長期欠席	中1	
23	親子関係	欠席がち	小5
24		長期欠席	小6
25		長期欠席	小6
26		学校内での問題行動	中1
27		非行	中2
28		長期欠席	中2
29		欠席がち	中3
30	欠席がち	中3	
31	保護者の考え方	学校内での問題行動	小6
32		学校内での問題行動	中1
33	不明	長期欠席	小6
34		長期欠席	小6

## 総受理件数34件

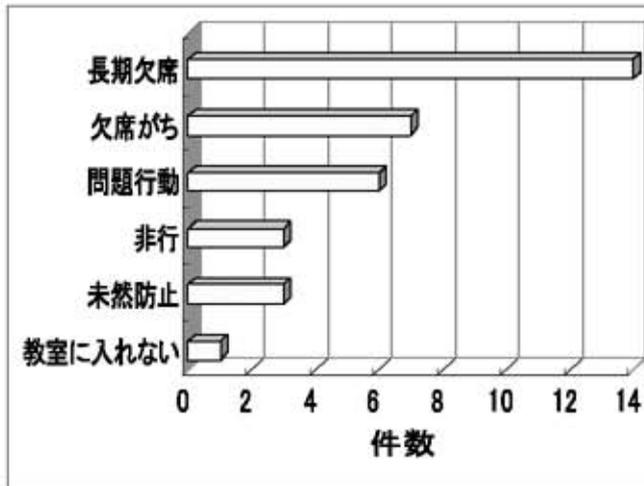


\*長期欠席の事由には、病気、経済的理由、不登校、その他が含まれます。

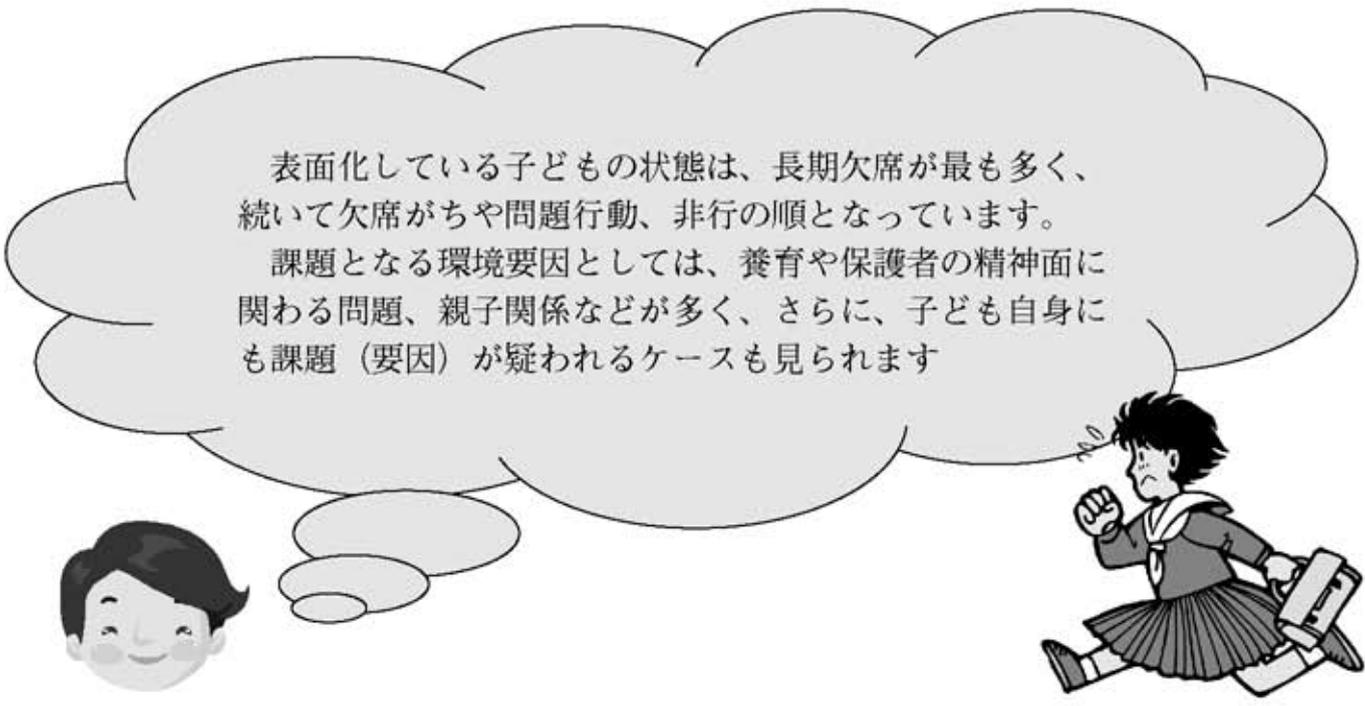
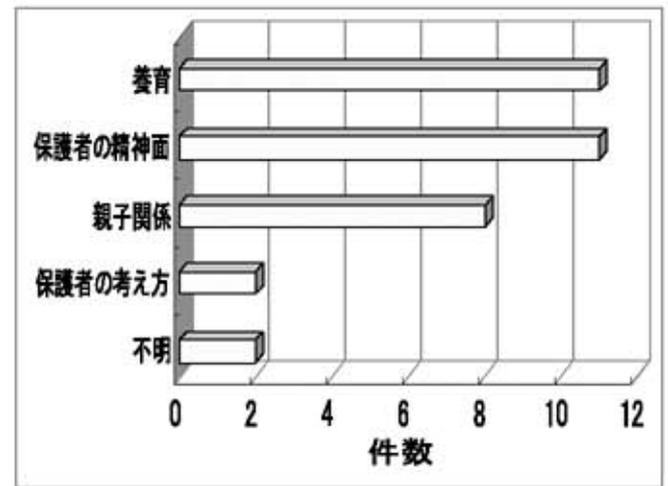
学年別件数



表面化している主な子どもの状態



課題となる主な環境要因



## 支援状況

継続支援中	28件
終結	6件

## 訪問活動回数

学校	106回
家庭	12回
関係機関等	70回

## 校内ケース会議

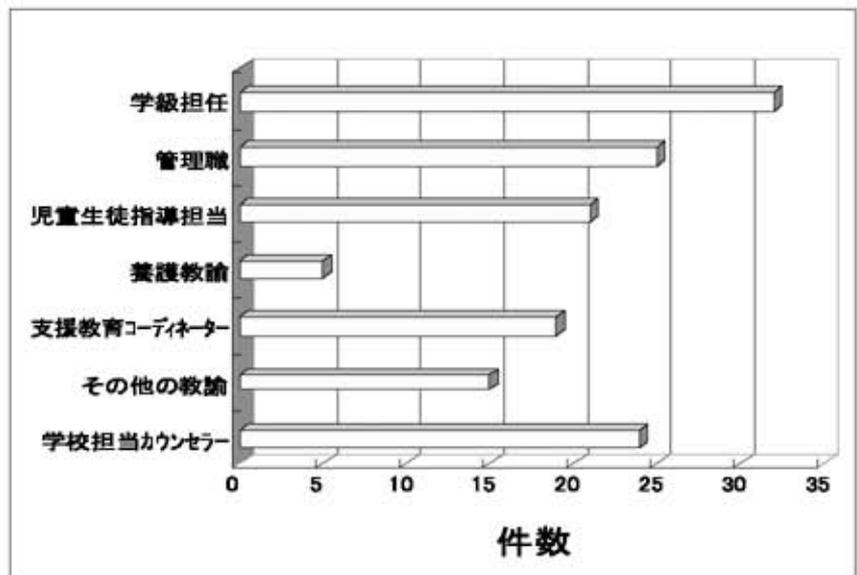
開催回数	62回
扱ったケース数	33件
参加教職員数	228人

## 関係機関を交えたケース会議

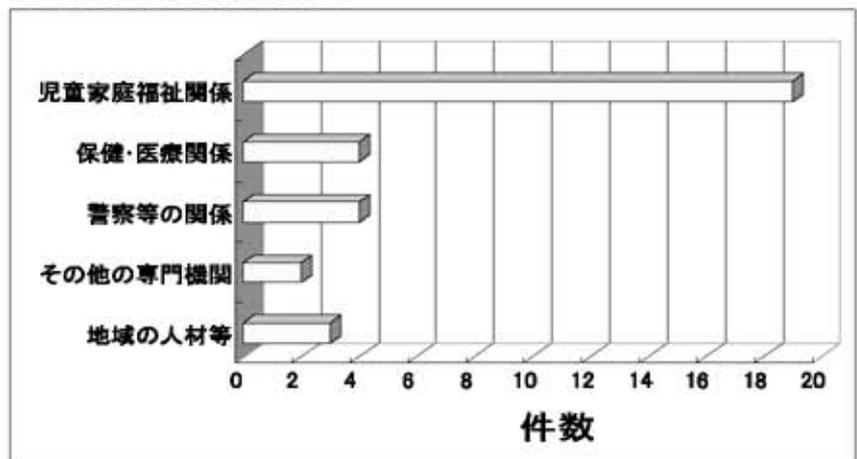
開催回数	6回
扱ったケース数	5件
参加教職員数	33人
参加関係機関の人数	18人

ケース会議では、参加者全員による情報共有・プランニング・役割分担等が行われます。また、ケース会議の主催は、基本的には学校にお願いしています。

## 連携した校内の教職員



## 連携した関係機関等



- ★学校支援体制の強化を目的に、SSWが学校や関係機関等を訪問し、連携を図っています。
- ★SSWによる家庭訪問は、その目的や有効性を学校と十分に検討し、必要と判断した場合には行っています。

## SSWが講師を務めた講演会等

回数	開催日	内容
1	7月1日	青少年相談員研修会
2	7月4日	青少年教育カウンセラー会議
3	7月7日	児童・生徒指導研修講座
4	8月22日	相模原市中学校教育研究会 生徒指導領域研究部会
5	8月23日	市内小学校の校内研修会
6	8月24日	市内中学校の校内研修会
7	8月25日	市内小学校の校内研修会
8	9月3日	市内教員の研修会

SSWの講師派遣をご希望の場合、当センターへお問い合わせください。



## 学校がSSWを活用するにあたって

- ① 学校（校長先生）からの依頼を基本としています。SSWに依頼するケースかどうか、判断に迷われている場合も、遠慮なくご相談ください。
- ② 「誰が何に困っているのか」「検討したいことは何か」等、課題を明確にしたうえで、ペースシートを作成・提出していただきます。
- ③ 学校と共に最善の方法を考え、学校と共に子どもや保護者を支援していくことを基本としています。
- ④ SSWと連携を図る窓口となる担当を決めていただきます。  
(例. 支援教育コーディネーター、児童生徒指導担当等)
- ⑤ 子どもや保護者への対応として家庭訪問を行う場合、初回は、担任の先生等の同行をお願いしています。

文部科学省のホームページから「スクールソーシャルワーカー実践活動事例集」がダウンロードできますので、ぜひご一読ください。

### 平成23年度 政令指定都市 1校あたりのSSW労働時間数の比較

市名	SSW 配置 人数	勤務 日数 ／週	勤務 時間 ／日	小中 学校 総数	1校あたり の時間数 ／週
名古屋	13	5	6	371	1.05
福岡	8	4	7	215	1.04
川崎	5	4	7.25	164	0.88
浜松	6	4	4.5	154	0.70
広島	5	5	5.75	206	0.70
北九州	4	4	7.5	193	0.62
相模原	2	4	7.5	109	0.55
堺	6	2	6	137	0.53
横浜	8	4	7.5	491	0.49
新潟	2	5	6	172	0.35
京都	10	1	8	246	0.33
静岡	5	1	6	129	0.23
大阪	6	3	6	529	0.20
札幌	5	2	3	301	0.10
仙台	…	…	…	…	未導入
さいたま	…	…	…	…	未導入
千葉	…	…	…	…	未導入
神戸	…	…	…	…	未導入
岡山	…	…	…	…	未導入

本市の本年度の『1校あたりのSSW労働時間数／週』は、左表のとおり0.55時間です。

本市は平均的な数値ですが、現在、来年度の拡充に向けて検討中です。





## 「ほっとひとこま」

その54



学校の相談室では、  
こんなほっとする時間が流れています  
青少年教育カウンセラーさんがそっと教えてくれました

中学の相談室では、昼休みは、相談に限らず自由に来室できる時間になっています。1つの教室に色々な学年の生徒がいて、思い思いに過ごしています。普段は、どの生徒も同じ学年のほぼ固定したメンバーで来室しています。ある日、来室したけれどいつものメンバーがいなくポツンとしている生徒が何人かいる状況がありました。皆違う学年だったのですが、誰が声をかけるでもなく、自然とひとつのテーブルに集まりボードゲームが始まりました。お互いにたどたどしく声をかけあいながらも、緩やかな時間が流れていました。友達や先輩後輩という関係を超えた交流がふと生まれるのも、相談室という空間ならではののかな、と感じる出来事でした。

(Eカウンセラー)

相談室では、中休みや昼休みに子どもの相談を受けることがあります。ある日、相談したいと男の子が来室しました。話を聞いてみると、「鍵をなくしてしまったら、お母さんがあきれ泣いてしまった、なくさないためにはどうしたらいいだろう」とのことでした。じっくり話を聞き、一緒にどうしたらいいかを考えると、「先生、やってみるね。」と彼は教室に帰って行きました。どうなっただろうと思ひながら、次の週、学校に出張すると、休み時間に、彼が来室しました。すぐに私の方へ駆け寄り、「先生、報告があるんだけど、お母さんにも謝れたいし、鍵も見つかった。」と笑顔で話してくれました。その表情は自分で解決できたことに、自信を持っているようでもありました。子どもたちは、一人で考えてみたけれど、どうにもいかない時に勇気をだして、相談室に話をしに来てくれるように思います。相談にきてくれた気持ちを大切に、一緒に考えながら、子どもたちが自分で解決していくお手伝いのできたらと思っています。

(Yカウンセラー)

小学校の相談室には、たくさん子どもたちが遊びに来てくれます。20人前後、多いときには40人以上の子どもたちが来てくれることもあります。声をかけるだけで精一杯ですが、どうやら誰かが見守ってくれているだけで、安心して遊ぶことができるようです。

毎週、遊びに来てくれていた子が、急に来なくなることがあります。どうしたのかな、と心配していると、体調を崩して学校を休んでいた、なんていうのはまれだと気づきます。外で友だちといっしょに元気に遊べるようになって、いつも見守ってくれる人は必要なくなっているんです。「あ、先生、久しぶり!今度遊びに行つてやるよ!」なんて声をかけてもらえるときが、私がほっと嬉しくなるときです。

(Rカウンセラー)

相談室の休み時間、多くの児童がゲームやお話をして過ごしていました。ある日、言葉遣いが悪いといわれている4年生のAさんがやってきました。はじめは、思い思いに遊んでいましたが、ゲームで盛り上がったあるグループからの、「キャー!」という歓声があがった瞬間、Aさんは「うっせえんだよ!」と一喝。雰囲気は一変してしまいました。しかし、両方のグループに声をかけてからしばらくすると、Aさんは、ホワイトボードに絵を描き始めました。それは、女の子の絵と『そうだん室、大事にね』という相談室に来ている子たちへ向けての丁寧な言葉でした。

自分の感情を相手に伝える言葉に変えて伝えるのは難しいことです。Aさんには伝える力が備わっていることを感じたとともに、私自身Aさんに「ありがとう嬉しいな」と伝えたとき、この嬉しい気持ちはどれくらいこの言葉にのっているのだろうと感じました。感情の言葉を一つ一つ丁寧に、日々子どもたちとの時間のなかで教わっています。

(Aカウンセラー)

### 日 日 草

「集団が高まれば、個も高まる」と学級経営ではよく言われていることは周知のことです。相談指導教室でも同様です。不登校であった生徒は、家族だけの生活から外の世界に歩み出すことは大きな勇気が必要です。相談指導教室「若葉」では、「通室できる、する」という意識づけのため10分間通室からはじめています。その次には、一時間、午前中の在室、昼食持参、一日の活動に参加するなど、集団生活に慣れることを初期の目標にしています。その中で、最大の支援者は仲間の生徒です。

「一緒にゲームしたら」の大人の声かけより「ゲームやらない?」という生徒の誘いの方が、直ちに集団の中に入れることができます。新しい仲間への思いやりは、次々と引き継がれていきます。スタッフの指導より生徒集団の高まりが一人ひとりの生徒の成長には大きな力になっていることを痛感しています。今日もまた、『〇〇さん、やろうよ』と呼びかけた生徒のやさしさに感動しています。

(青少年相談センター 嘱託職員 清水 孝介)

### ヤングテレホン相談



一人でも悩まず まず相談!

小・中・高校生や19歳以下の青少年の抱える悩み、心配事などを本人や保護者から直接電話でお受けし、専門の相談員と一緒に考えます。(匿名での相談もお受けします。)

専用電話 042-755-2552 Eメール相談 (24時間受付) yantele@city.sagamihara.kanagawa.jp

受付時間 月曜日～金曜日 午前8:30～午後9:00 (祝日は除く)



Eメール相談